

第4部

総括

第4部 総括

1、植生に関する調査結果と考察

本調査において、調査対象区域のうち海岸部から標高 300～ 750mの稜線部に至る約 3,000haを50m×50mのメッシュ11,708個に区切って植生図を作成した。

その結果、当該地の多様な地形や特殊な地域気象（尾根越えの強風・常風等）を反映して、9タイプの植生がモザイク状に分布し、海岸近くには砂丘植生や風衝草原が見られ、その内側に針広混交林が広範囲に広がり、尾根から稜線部にササダケカンバ群集やエゾマツトドマツ群集、コケモモハイマツ群集が大小様々な面積サイズでパッチ状に分布していることが確認された。（植生図）

各植生タイプの面積割合は針広混交林の36%が最も多く、次いでササダケカンバ群集28%、コケモモハイマツ群集14%、エゾマツトドマツ群集12%となっている。

また、今回の踏査によってシダ8科19種を含む43目76科 270種の高等植物が確認された。

本調査区域の中心域を占める約1,200haの民有林や国有林では、その一部について過去、昭和20年代及び昭和40年代に択伐による森林施業が行われている。今回この伐採によるギャップ（林冠欠損部）動態の把握を航空写真（1968年及び1993年）の画像解析によって試みた。

その結果、ギャップ率は1968年の20.2%から1993年の4.5%に減少しており、伐採による影響から順調に回復していることが確認された。（写真－19）

（写真－19）過去の伐採地のギャップ修復状況 [テッパンベツ川中流域]



これらの調査結果から、本地域においては、標高 0 m の海岸部の砂丘植生から標高 300～1000m を越える稜線部の高山植生まで、極めて多様な植生が途切れることなく一体的に自然状況を保持していることが明らかになった。（写真－20）

（写真－20） 海岸から高山帯に至る自然植生の連なり



なお、本地域の広範囲を占める針広混交林は、北海道の最も代表的な森林であるが、北海道の多くの地域においては明治以来、農林業等の開拓が進められ、今では広面積の針広混交の自然林は知床を除きほとんど消滅している状況にある。

したがって、本地域は北海道の代表的な森林植生の保存地域として、また、森林生態系の長期観察フィールドとして極めて貴重な存在となっている。

2、動物に関する調査結果と考察

本地域における動物に関する特性は、サケ・マス類の遡上と自然産卵を可能としているルシャ、テッパンベツ、ポンベツの自然河川を重要な餌場の一つとしている大型哺乳類と猛禽類が豊富に生息していることと、このような本来の食物連鎖の姿が極めて良好な状態で維持されていることである。

[哺乳類]

知床の哺乳類を代表するヒグマについては、餌条件等良好な生息環境に恵まれた本地域は、知床半島の中でも特に生息密度が高いと考えられる。

本調査時においても10月20日にルシャ川河口近くで幼獣1頭(写真-21、22)を、また、11月21日にポンベツ川河口付近で成獣1頭を目撃した他、糞(写真-23、24)や足跡、カラフトマスの採食痕跡=半分に食いちぎられた死骸が確認された。(写真-25)

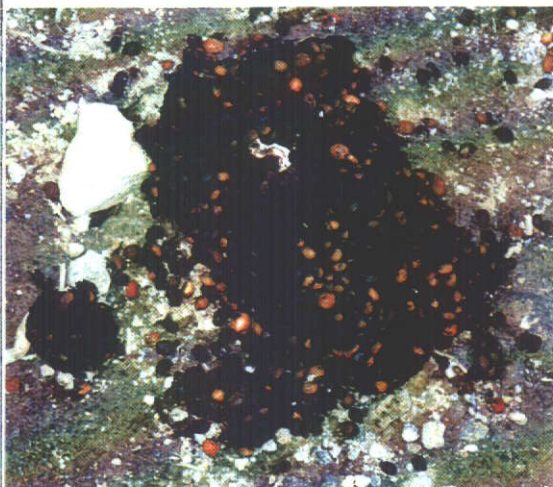
(写真-21) ルシャ川岸のヒグマ



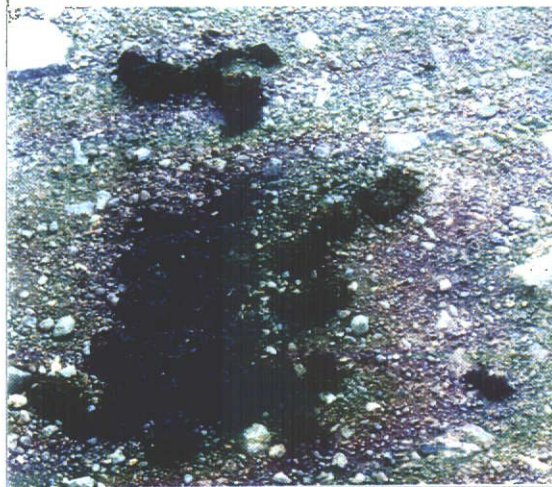
(写真-22) 同 ヒグマ



(写真-23) ヒグマの糞



(写真-24) ヒグマの糞



(写真-25) 採食痕跡=カラフトマスの死骸



知床岬を除き急峻な地形の多い知床半島においては、海岸から河口部に平坦地の広がる本地域は、エゾシカの生息地として重要な位置を占めている。海岸平坦部に広がるササ原や草地は冬から早春にかけての貴重な餌場と越冬地になっており、また、比較的傾斜の緩やかなルシャ、テッパンベツ川の流域の針広混交林は、エゾシカの冬期の泊まり場、無積雪期の餌場などとして広く利用されている。(写真-26)

(写真-26) ルシャ川岸のエゾシカ



